



歌舞伎と近代戯曲（青果と綺堂）

朗読劇

岡本綺堂作「番町皿屋敷」

演出：神谷尚吾／丸知亜矢

真山青果作「頼朝の死」

演出：岡田一彦／かこまさつぐ

日時 2017年
1月27日（金）～1月28日（土）

会場 名古屋北文化小劇場（名古屋北區志賀町4丁目60番地の31）

27日（金）15時開演

岡本綺堂作「番町皿屋敷」演出／神谷尚吾
真山青果作「頼朝の死」演出／岡田一彦

27日（金）19時開演

岡本綺堂作「番町皿屋敷」演出／丸知亜矢
真山青果作「頼朝の死」演出／かこまさつぐ

28日（土）11時開演

岡本綺堂作「番町皿屋敷」演出／神谷尚吾
真山青果作「頼朝の死」演出／かこまさつぐ

28日（土）16時開演

岡本綺堂作「番町皿屋敷」演出／丸知亜矢
真山青果作「頼朝の死」演出／岡田一彦

28日（土）16時

公演後

アフタートークイベント
ゲスト：天野鎮雄（俳優、劇座代表）

2016年12月1日（木）よりチケット販売開始

【お問合せ】
一般社団法人日本演出者協会
東海ブロック
080-4536-9570

岡本綺堂 作「番町皿屋敷」

身分を越えた青年旗本と腰元の恋。家宝の血を割ってまで男の愛を確かめた女の行く末は……
桜の名所江戸山王神社。花見に遊ぶ白柄組の旗本青山播磨は、町奴と喧嘩になるところを、来あわせた伯母真弓にとめられ「伯母様は苦手じゃ」と苦笑い、「散る花にも風情があるのう」と行く春を惜しむ景色が、江戸の浪漫を色濃く漂わせる。
播磨は腰元お菊と相愛の仲。が、播磨の縁談の噂に日々心を痛めるお菊は、割れば手討の家宝の血を割って播磨の心確かめようとする。過ちとしてお菊の罪を許す播磨だった。しかし、お菊がわざと血を割った真相を知り、真心を疑われた無念さから、播磨はお菊を手討にし井戸に投げ込む。播磨の本心を知ったお菊は満足して死んでゆく。生涯一度の恋を失い、自暴自棄となった播磨は町奴との喧嘩に槍を手に屋敷を飛びだしていく。

真山青果 作「頼朝の死」

父頼朝は何故死んだのか。真実を知りたいと悩む息子頼家に、母政子は、「家は末代、人は一世」と武門の定めを厳しく言い放つ。
鎌倉法華堂では、前の将軍源頼朝の三回忌法要が行われている。だが、現将軍で頼朝の子である頼家（よりい）の姿はない。門の中から、顔を隠した若い女が、護衛の郎党に追い出されてくる。そこへ顔を覆面で隠した畠山重保（はたけやましげやす）が現れる。重保はなにか重大な秘密を抱えている様子。女は、実は御所に仕える小周防（こずおう）という少女で、頼朝の妻である尼御台（あまみだい、北条政子）から、頼朝を弔う卒塔婆を墓に供えるように命命されて来たのだった。重保は小周防をむりやり去らせたあと、地面に泣き崩れる。
ちょうど2年前の深夜、頼朝は、女に変装して御所の塀を乗り越え、小周防のもとへ忍ばんとしていた。それを、警固をしていた重保が怪しんで、頼朝を斬り捨ててしまったのである。墓参をすませた小周防に重保は頼朝の死の真相を告げ、去って行く。何も知らず重保を慕っていた小周防はその場に泣き伏す。
鎌倉石壺の御所。亡き父の寝所で現将軍の頼家が酒を飲んでいる。法要の席から畠山重保が駆け去ったことを聞いた頼家は、重保が父の死の真相を知っていると確信する。そこへ重保が出家したいと願いに来た。頼家はその理由を言えと責めた。たしなめる母に、頼家は「なぜ自分一人が秘密を知ることができないのか」と迫る。頼家は小周防を自分の側室（そばめ）にしたいと告げる。頼家は小周防に父を失った自分の悲しさを語り、知っていることをどうしても聞かせてほしい、聞かせてくれればお前の恋を叶えてやるとかき口説く。苦悩する小周防を、重保は涙と共に斬り殺す。頼家は狂気のように重保を責めるが、尼御台は長刀をかまえ、源氏を守るためならば、たとえわが子でも、そのままにはおかぬと、断固たる決意を見せるのだった。